



理事会だより (4・8)

一、各部報告 総務部：来年度の会員数は今年度より減少見込み。開成グループ解散、グループ名称変更（雫の会→草むら俳句会）事業部：桜まつり作品集・賞品を十九日に発送して完了見込み。会計部：三年度年会費の受付。

二、定期総会議案書案（事業報告・計画、決算・予算）につき先月までの検討を踏まえて提示され確認・承認の上総会に備えることになった。

三、佃悦夫前会長の「俳句の岸辺」につき「俳句の岸辺」刊行委員会として山田副会長を委員長として刊行に向け具体的に取り組むことが報告された。

第68回定期総会 4月22日出席18名委任状40名にて成立し、事業報告・計画、決算・予算につき審議・承認された。「俳句の岸辺」刊行についても承認された。（4・5頁に報告）

理事会日程 5/13、6/10、7/8
いずれも木曜日6時より、於けやき

「俳句おだわら」10句抄 (644号より)

杉山あけみ 抄出

艶やかに夜を脱ぎゆく氷柱かな
空つぽのバスが又行く寒さかな
葉局に長椅子一つ日脚伸ぶ
反り返る下仁田葱や妻の留守
霜柱一步一步に生きる音

春寒し今日は豆でも煮てみるか

春近しプリン匙の匙の平べつた

陽の匂ひ余るほど浴び干大根

長子生れ水金地火木土天海冥

伊達眼鏡かけ鼻の息づかひ

中村昌男 抄出

水仙の匂い届けよ黄泉のそら

春曉は初まりの色今日の色

暮早し野良着のままの厨事

初春やあるもののみな淑として

膝に寄る兎に陽の匂い冬帽子

空つぽのバスが又行く寒さかな

遠ざかるテールランプや名残雪

春めくや予定なき日の薄化粧

朝霞駅に海抜表示板

初午やひかる雲積む芙蓉峰

陌間みどり

二見 和江

石田加津子

小野 菊土

中根登美子

木村 和彦

畠 梅乃

木村美千代

大石 和子

小島ノブヨシ

木村 和彦

勝木 澄子

久保寺トミ子

神山つとむ

斎藤 静

二見 和江

石井きよ子

高橋みどり

鳥海 壮六

古屋 徳男

第七十四回小田原桜まつり俳句大会

「新型コロナウイルス蔓延拡大防止の観点から第一部の兼題作品募集のみ行なった。兼題は「桜」「春泥」で投句者一八三名三〇五組と過去の記録を大幅に更新した。

兼題入賞作品（高点順）

神奈川県知事賞

春泥の道もて繋ぐ峡十戸

小田原市長賞

桜散る十九のままの兵の墓

小田原市観光協会会長賞

春泥や華麗に跳んだはずなのに

小田原俳句協会会長賞

母の座も妻の座も降り夕桜

小田原俳句協会賞（以下20位まで）

通学の列ふくらます春の泥

葬のみに帰るふると花の冷え

咲き満ちて桜力を抜きにけり

女には女の歩巾春の泥

春泥の靴も乗り込む御殿場線

点訳へ花ひとひらの附箋かな

父のこと今なら解るさくらかな

退院の父に迂回の桜道

清水 吞舟

中村三恵子

芳賀 陽子

澤口 文子

須田 聡子

吉岡 孝三

八城 湖楊

中村三恵子

松田ます子

石井千代子

芹澤 常子

小林 環

選者特選賞評

めつむるたび五十四帖 花の火車 城川さぶ老

誰もが知る『源氏物語』だが、谷崎か与謝野か、それとも原文を読破したのか。いずれにしる華麗な宮廷絵巻が眼蓋に去来する。と突如「花の火車」と火の粉が百花撩乱する。この下五の発想は独自であり、読者をして迷宮に導く謂でもあろう。

（佃 悦夫）

靴を買う此処より二キロ山桜

岡田 典代

靴を買って外に出る。ああ、あの山には親しい山桜があるよ。と、それだけのことである。あれを書こうとか、これを伝えたいという作為（意図）はない。これは、この型式の骨法である。作為があると、ことばは作為の奴隷と化するしかない。必然、卑しくなる。

（大石 雄介）

母の座も妻の座も降り夕桜

澤口 文子

子は既にひとり立ちし、また、連れ添った夫も見送り、肩の荷を下している作者。それまでは花見どころではなかったが、夕餉の仕度を気にせずゆったりと桜に癒されていよう。若い頃の花見の気分とは、ひと味もふた味も違い、境涯俳句のひとつとして共感を呼ぶ。

（池田 忠山）

春泥の靴サーカスの小屋に入る

西村 英子

何年か前、松田町の川べりの広場でサーカスのテント小屋を見た。幼い頃田舎へ回ってきたサーカス小屋。

紙漉きの音の重たき花の昏れ

春泥や押しでは引いて一輪車

花散るや半透明になる孤独

さかあがりじゃうずにできて花の中

糸桜伝えきれないことばかり

奉書もて巫女の結び髪初ざくら

大寺に啜る茶粥や朝桜

春泥に歩幅乱さず盲導犬

選者特選賞

(小田原俳句協会名誉会長) 佃 悦夫特選

めつむるたび五十四帖 花の火事

(小田原俳句協会顧問) 大石雄介特選

靴を買う此処より二キロ山桜

(小田原俳句協会会長) 池田忠山特選

母の座も妻の座も降り夕桜

(鷹俳句会小田原代表) 村場十五特選

春泥の靴サーカスの小屋に入る

(たけのこ会代表) 宮崎悦女特選

春泥やガキ大将のゐた昭和

(沈丁俳句会代表) 中野文子特選

点訳へ花ひとひらの附箋かな

(春野代表) 長谷川きよ志特選

水音も揺れたる枝垂桜かな

若村 京子

久保寺トミ子

杉山あけみ

大島美恵子

芳賀 陽子

今井 匡子

中根 和子

清水 吞舟

城川さぶ老

岡田 典代

澤口 文子

西村 英子

日高 朝代

石井千代子

田畑ヒロ子

小屋の周囲は川原や公園など舗装されず、雨降ればどろんこだったという懐かしい思い出。泥の付いた靴で慎重にサーカス小屋へ入ってゆく、一昔前の日本を見た思い。

春泥やガキ大将のゐた昭和

もう半世紀以上続いていた小学校の同窓会が終ってしまいました。担当者は大変だったと思います。一人

居の先生の碁の相手をしていた生徒もいました。二十三才で亡くなった友。毎年五人の友が墓参。子供もい

てにぎやかだったあの頃。去年は私一人。淋しくなります。

点訳へ花ひとひらの附箋かな

(宮崎 悦女) 石井千代子

図書館で点訳奉仕をしているのでしょうか。一人で

も多くの人に読んで貰う為に。私も何年前に点字の

勉強をした事があります。仲々難しかった。それを点

訳した上に桜の開花を知らせる様に花びらの附箋にす

る。なんて優しい事でしょう。句からその人柄が解り

ます。(中野 文子) 田畑ヒロ子

水音も揺れたる枝垂桜かな

今にも水面に触れんばかりの岸辺の枝垂桜。上五の

助詞「も」の効果が一句を通底して秀逸。その枝垂桜

を的確に詠んで鮮やかな実景が浮かぶ。我が先師故黛

執は「平明、美しい景が見える」句を作句信条とした。

正にお手本のような佳句である。(長谷川きよ志)

令和2年度事業報告

〈主催及び主管事業〉

令和2年 第73回小田原桜まつり俳句大会：コロナウイルスの感染防止のため、第一部作品募集のみ実施。第二部の大会は中止となる。

兼題：桜、野遊 投句者168名 投句数275組。

10月11日予定の第67回小田原市民文化祭俳句大会は：コロナウイルスの感染防止のため中止。

10月11日 秋の吟行会 生涯学習センター「けやき」にて実施。担当：事業部

当日囁目3句出句 総互選 参加者 29名

令和3年 2月3日予定の立春青空句会：コロナウイルスの感染防止のため中止。

第57回小田原梅まつり俳句大会改め「令和2年度小田原梅の里さんぽ俳句大会」とし、第一部（兼題の部）作品募集のみ実施。兼題：梅、かいつぶり

投句者173名 投句数 258組。

第二部はコロナウイルスの感染防止のため中止。

〈後援事業〉

第64回滝まつり俳句大会（山北町生涯学習センター）山北町俳句協会

第45回笛まつり俳句大会（南足柄市女性センター）みなみ俳句協会

第11回おおいゆめの里俳句大会（大井町立そうわ会館）おほみ俳句会

何れもコロナウイルス感染防止のため中止。

〈その他の事業〉

1. 作品展示

小田原城址公園（春夏秋冬） 担当 近藤久江

小田原市立病院ギャラリー（毎月） 担当 田中幸子：コロナウイルス感染防止のため展示見合わせ中

2. 協会報特別配布 中央図書館 小田原駅東口図書館 生涯学習センターけやき

尊徳記念館 郷土文化館 小田原文学館 生涯学習センター国府津学習館

小田原市観光協会 川東タウンセンターマロニエ 小田原箱根商工会議所

神静民報社 神奈川新聞社県西総局 UMECO 小田原駅前観光案内所

3. 神奈川県視覚障害者福祉協会より依頼の文芸コンクール俳句部門の兼題、選句を担当

令和3年度事業計画

〈主催及び主管事業〉

第74回小田原桜まつり俳句大会：新型コロナウイルスのため、

第一部（兼題の部）作品募集のみ実施。第二部の大会は中止。

兼題：桜、春泥 2月27日締切り

秋の吟行会 場所、日時未定 担当：総務部

11月3日令和3年度小田原文化の日俳句大会（UMECO）

令和4年 2月4日立春青空句会（小田原城址公園、天守閣広場）

2月6日第58回小田原梅まつり俳句大会

〈後援事業〉

令和3年 第65回 滝まつり俳句大会（山北町健康福祉センター）山北町俳句協会 中止

令和3年 月 日第46回笛まつり俳句大会（南足柄市女性センター）みなみ俳句協会 未定

令和4年 3月5日 第12回おおいゆめの里俳句大会（大井町立そうわ会館）おほみ俳句会

〈その他〉

佃悦夫前会長（現名誉会長）の協会報掲載「俳句の岸辺」を小冊子として刊行。

令和 3 年度小田原俳句協会役員一覧

名誉会長 佃 悦夫

顧問 新井たか志

大石 雄介

会長 池田 忠山 (担当・全般、広報部、総務部)

副会長 長谷川きよ志 (担当・事業部) 山田 照子 (担当・会計部)

〈専門部理事〉 ○印部長

総務部 ○佐々木重満 近藤久江 宮崎悦女 伊藤はる子 木村幸枝

岡本史郎 田中恵一(新任)

事業部 ○長谷川きよ志 田畑ヒロ子(梅まつり事務局担当)

小野菊土(桜まつり事務局担当) 田中幸子(文化祭事務局担当)

中村昌男 岡田典代 守屋まち 若村京子 中根和子 芹澤常子

石井千代子 瀬戸りん 米山 翠

広報部 ○村場十五 齊藤 桂 畠 梅乃

会計部 ○寶子山京子 加藤かほる 陌間みどり

理事 青木勝子 青木たけを 秋山 昇 一ノ瀬茂代 伊藤道郎

大石和子 小澤純子 小澤園子 加藤まり子 神山つとむ

木村和彦 小島ノブヨシ 西賀久實 佐宗欣二 澤口文子

杉崎せつ 須田聡子 瀬戸正洋 瀬戸 悠 竹下由里子 田淵令子

出澤洋子 豊田幸枝 鳥海壮六 中根登美子 中野文子 中山妙子

山崎悦子

〈監査部〉 川本育子 杉山あけみ

新入会員 神野美代子(青梅の会) 横塚昌平(おほゐ俳句会)

石井秀稀(草むら俳句会) 下平美子(鷹俳句会小田原)

退会会員 乾 利子 宇田川聖一 和田璣子 山岸秋光 西村英子

牧石美千雄 加藤幸子 高橋秋月 柳川楊雨 奥津ちわき

遠藤シヅ子 下澤操子 濱本主雄

グループ名称変更 雫の会→草むら俳句会

退会グループ 開成

代表交替 零(伊藤道郎→岡本史郎)

沈丁(中野文子→寶子山京子)

(4月1日現在 グループ数 14・会員数 160名)

俳句おだわら(4・19メ切り、到着順)

◆鹿火屋(3・26)

久江報

鳥ごゑの天楽となる桜かな

足立 和子

桜もち身丈の暮らしいとほしむ

川本 育子

啓蟄の体重軽く地球踏む

高橋 小糸

花満ちてふと孤独なる卒寿かな

山崎 悦子

さくらさくら思ひの丈を舞ひにけり

近藤 久江

◆春野(3・21)

きよ志報

喝采のやうな波音風光る

伊藤はる子

しやぼん玉くるくる空を翻弄す

瀬戸 悠

チアガールポンポン振りて春を呼ぶ

内田知江子

のどけしや忘れ防止の大きメモ

二見 和江

啓蟄や無人駅より人の波

尾崎 一夫

田の神を誘ふやうに菜種梅雨

秋山 昇

地虫出づ蔵書が邪魔で窮屈で

長谷川きよ志

◆香雨・梅ごち(3・14)

忠山報

春炬燵同じ話を始めから

肥後ちさこ

鍵盤にをどる子の指クロツカス

関戸わよこ

三陸へ降りたつホーム山笑ふ

青山 典子

ふらここやハイジのやうに空を蹴り

門松 鳳文

海見ゆる丘の日溜り鼓草

吉田 百代

ゆるやかに航跡ほどけ春の海

吉田 康雄

おほまかな絵地図でたどる春の昼

陌間みどり

口中に野山の匂ひ蓬餅

小澤 純子

置手紙めきてぶらんこ揺れ残る

池田 忠山

◆こよろぎ(4・8)

つとむ報

コンビニの看板の上つばめの巣

板谷 雅泉

再会の話のはずむ初ざくら

植松テル子

まだ白きアルプスかすめ鶴帰る

神山つとむ

◆沈丁(4・3)

寶・京子報

始発駅母が見送る巣立かな

中野 文子

巣立鳥駅舎の糞の乾きをり

若村 京子

孝行を気取りて写す花の下

柳澤ミサ子

学童の迎へも最後巣立鳥

田中 恵一

新コロナ負けじと歌う卒業生

河本 純子

花種蒔く会えない分のひとつまみ

瀧本 敦子

あつけない息子の電話巣立鳥

勝木 澄子

怖々と竝ぶ小燕巣立ちの日

菅野 英余

傾きてなお命積む桜かな

高井 幸子

祝着をたたむ作法や花の昼

片野 節子

太陽の塔を目かけて巣立鳥

寶子山京子

◆みなみ(3・13)

かほる報

花の風すくとんと愚痴の払はれり

加藤 富江

みどり鬼は指の先から春眠る

豊田 幸枝

春シヨールさらりと旅の風となり

市川めぐみ

合戦の古き陣あり蓬餅

斎藤 静

啓蟄や病の床を起ちあがり

加藤 健治

亀鳴くや白髪ふやして三男坊

飯田 愛

受験する子よりも親の緊張感

小瀬村信子

早春の薬師の庭に検診車

加藤れい子

草餅や昭和を生きた母の味

村上 龍山

家族みな春眠の底日曜日

加藤かほる

◆たけのこ(4・8)

悦女報

一歩ずつ菜の花愛でて松田山

久津間百合子

電話の主元気印に進級す

徳田 公子

満天星の花蜜にしてコーラス隊

三木 泰子

桜蕊おもしろさうな未来あり

小宮 早苗

声明の湖平らかや五月来る

宮崎 悦女

◆青梅(3・14)

幸子報

行く春や川辺の道も人憩ふ

大塚 行人

城濠をめぐりて夕の花筏

神野美代子

石けりや信濃の春を思ひけり

湯本とし子

「すわりなよ」たんぽぽの声足元に 加藤まり子

春めくや手にたつぷりと化粧水 久保寺トミ子

雲水の草鞋とられる春の泥 田渕 令子

たんぽぽや一年生の帰り道 田中 幸子

◆山北(3・20)

由里子報

チェンソーに彩揺れ動く芽木の山 石田加津子

卒業式そここ拳合わす笑み 尾崎 幸子

本能と自肅の間山笑う 尾崎 竹詩

春眠を深山嵐にさらわれる 中山 妙子

倒立に励む少年燕くる 和田恵美子

当たり前が消えた一年芹すすぐ 竹下由里子

◆実のり(4・15)

たか志報

あこがれの吉野の里の山桜 岩本ひさみ

亀鳴くや寄り添ふ亀の甲羅干し 杉本 久子

亀鳴くや助手席したに電子辞書 木村 幸枝

風少し雨の少しを山桜 新井たか志

◆おほろ(4・14)

昌男報

妻である今を大事に花の旅 中津川晴江

制服の襷きつちりと入学す 中根登美子

うららかや湖面をすべる漁り舟 中村 昌男

うららかやないしよ話は爺と孫 廣田 悦子

うららかや人の心も丸くなる
 桜蕊降る島田くずしの襟足に
 数多なる人生見つめ老桜
 風を受け風を紡いで豆の花
 姉の齡越えた妹三・一一
 春うらら歩み出したい大師像
 藤の花伸びる力が山被う
 花吹雪寡黙の風が独り占め
 外堀の風とあそぶや花筏
 春風やハミングも出る峠道
 春うらら門出の笑顔眩しけり

◆鷹(4・8)

二上 光子
 横塚 昌平
 石井きよ子
 石井千代子
 小野 菊土
 香川 花子
 風間 秀泰
 加藤 春江
 坂入清四郎
 瀬戸とみ子
 高橋みどり
 十五報
 青木 孝子
 池田 令子
 西賀 久實
 佐宗 欣二
 須田 晴美
 中田 笑子
 百川 秀子
 山崎美知子
 庄司 下載
 瀬戸 りん

犬連れて嫁いで来る花菜かな
 鉄棒に浮かせし踵チューリップ
 ヒヤシンス粗暴なる子の目の哀し
 小綬鶏に谷戸の小藪の明けにけり
 灯を消せば夜の澄みゆく白木蓮
 山法師箱根の谷の深きかな
 輪を広くラジオ体操梅香る
 行く春や土塊鳩のこもり鳴き
 春光や長ながなびく鉤くづ
 薔薇の芽や窓辺に透ける砂時計
 旭日や春筍とどく京の宿
 坊泊り一碗に浮く芽山椒
 二合飯二人で三日春寒し
 びしよ濡れの靴に朝日や沈丁花
 引力を思ひ出したる桜かな
 うららかや安産石に小座布団
 紅椿枝葉の間に映えにけり
 葉桜やテイクアウトのハンバーガー
 老いの本増ゆる書棚や青嵐
 術前の同意書の嵩花の雨
 伸びらかにパラグライダー夏来る
 冷酒を手酌で飲むや開業医

高橋久美子
 中山智津子
 齊藤 桂
 芹澤 常子
 島 梅乃
 山口安規子
 市川 好子
 大島美恵子
 田下 昌人
 中根 和子
 高橋 正子
 米山 翠
 大木 敬子
 加藤 幾代
 北崎 修
 守屋 まち
 來田 新子
 大沢 年子
 片野 秋子
 小林 環
 近藤 絢子
 下平 美子

声にしてけふの斯く斯く四月来ぬ

杉崎 せつ

海風の朝の段畑葱坊主

関根 琉子

耳遠き事諾へり白牡丹

鳥海 壮六

初蝶や土に研がるる鍬の先

古屋 徳男

後悔の時は戻らず卒業歌

村場 十五

◆零(4・16)

史郎報

この年齢になりてもありぬ春愁ひ

青木たけを

ツンと山葵言葉はときにひとを刺す

伊藤 道郎

苧環おだまがつつましやかに庭に咲く

井上 良子

目つむれば春の愁いの深くなる

木村 和彦

春愁や鏡黙して見つめおり

佐藤 正子

鶯や「いい所とこだね」と旅の人

中村 裕子

濁りなき水よぶ山葵北信濃

野川木一路

さくらさくらひとひらひとひら天の声

岡本 史郎

◆草むら(4・18)

重満報

味噌汁の旨し朝餉や喜寿の春

石井 秀稀

老家族パンコーヒーに夏野菜

井上 和子

仔雀は人魚に成ることつづけてる

佃 悦夫

藤壺の黙の拒絶や藤の花

佐々木重満

◆無所属

筍を掘る地球の罫線ずたずたに

小林永以子

記念樹の梅は満開子は父に

一ノ瀬茂代

三寒のまたも温めなおす風呂

出澤 洋子

あずま屋に緩めるリード日脚伸ぶ

木村美千代

桜さくら昨日三分や満開に

蓑宮 わか

裏技は手の内に秘め猫の恋

北村 文江

菜の花や石垣山からどこへ飛ばう

岩楯恵津子

花びらを懐紙に母へ二・三片

澤口 文子

春眠や歩行も豊か旅の夢

鈴木久美子

バイオリンつなぐご縁や桜降る

石田 和代

山桜転々とする吾が想い

穂坂志げる

真夜の地震三寒のかたまりの中

山田 照子

春満月疲弊の街を包みたる

小澤 園子

桜草臨月の子の里帰り

青木 勝子

「よいしょ」とは齢の念力風薫る

田畑ヒロ子

春泥のけけと翔びたつ一尾かな

大石 雄介

頬杖ふと冷たい風になっていた

大石 和子

縮小と拡大アロハシャツ真つ赤

瀬戸 正洋

子ら眠り桜蕊降るまひるかな

須田 聡子

垣結はぬ袖の暮しや雪柳

山口 千代

花蛇の唸り火星の風の音

杉山あけみ

四次元の窓に貼り付く花のしべ

岡田 典代

城苑俳句・夏の部

(合同句集第十二集78〜92頁より近藤久江抄出)

群衆のなかの孤独や捕虫網

青蘆のけふも屈託なきそよぎ

愛憎のあはくなりたる団扇かな

山々は墨絵の中に梅雨深し

宅地化に抗うように青田風

田水張る十戸の村が光りをり

店先の貝が水吹く薄暑かな

葉桜や午前十時の映画館

町並の真中にたてる青田風

石仏や一面十葉従へて

草刈りて馬頭観音現われし

敷藁の程良き湿り茄子の花

ハンカチの折目きつちり妣懐ふ

垣越えて紙飛行機や五月来ぬ

故郷は今も単線さくらんぼ

美容師の涼しき鉢捌かな

鮎追うて日暮の迫る瀬音かな

八の字に茅の輪くぐりて大鳥居

青蜥蜴美しすぎる殺気かな

十葉の花のさかりを夫逝けり

瀬戸 正洋

林 スミ子

廣川 公

廣田 悦子

二上 光子

二見 和江

古屋 徳男

寶子 山京子

牧石 美千雄

三木 泰子

蓑宮 わか

宮崎 悦女

村場 十五

百川 秀子

故森 正勝

守屋 まち

柳川 楊雨

柳澤ミサ子

山岸 秋光

山口安規子

秩父路へ一人遍路やかたつむり

風鈴に憂きこと一つ流しけり

アボカドと生ハムサラダ星涼し

あめんぼう地図なき水のその中に

梅ほすや太陽汗をかかせをり

風に乗る遠草笛や山啼ける

雨粒の音のいろいろ濃紫陽花

名山のバツジぐるりと登山帽

著我咲くやジープの轍行き止り

青嵐地球大きく息をする

山口 千代

山崎 悦子

山崎美知子

山田 照子

山本 勝昭

湯本とし子

吉田 百代

吉田 康雄

米山 翠

若村 京子

俳句おだわら鑑賞(令和3年3月号)

冬帽を地蔵にかぶせ童女笑む

ほほえましい光景に思わず笑みが浮かぶ。私も大好きで子供達にも読み聞かせた童話「かさこじぞう」の世界さながら。この子もお母さんか誰かに読んでもらったのか。おじいさんが自分の被っていた笠をお地蔵さんに被せた様に、自分の帽子をお地蔵さんの頭に。そして、傍らの本を読んでもくれたお母さんに「こうだったね」と微笑みかけたのだ。

現在の騒然とした世に心の和む一句。無駄のない端的な表現に物語の世界が広がる。

(守屋 まち)

伊藤 道郎

池田 忠山方

小田原俳句協会 千二五〇一〇〇二二 小田原市本町二一三二二

10